



# 名古屋いのちの電話



写真 文珠幹夫

天の鞭

坂村真民

人間ができてから  
一番悲しんでいるのは

地球です

だからわたしは

地球に額をつけ

毎晩彼岸の川原で

地球よ平安なれ

人類よ幸福なれ

と祈り続けてきました

地球には今

戦争の犠牲者や難民や

地震風水害の被害者で

一ぱいです

飽食暖衣は日本だけです

きつと天の鞭が下されることでしょう

これからの日本を背負う人よ

慈眼視衆生の人となって下さい

「愛の道しるべ」より



## 茶のみ友達

今川<sup>かず</sup>子

「今日は特別あなたと御一緒に食べたいお菓子があるので、もし御都合よかったら出ていらっしゃいませんか」と88才のK夫人からの電話がかかる。

バス通りをはさんで南と北の丘の上に住む私達である。自動車用につくられたでこぼこのコンクリートの歩きにくい坂道の上り下りは老人にはこたえる道路であるがK夫人は腰の故障で他易く外出が出来ないので84才の私が杖を曳いて出かける。坂の途中で二、三回休みながらゆっくりと訪れる。それまでにしても出かけてゆくのはどうしてなのか。同じ年頃のお互いに気の張らない共通性のある二人の老未亡人との語り合いは身体の老化で日頃家に籠り、刺激の少ない私達に活気を与え心が慰められて生甲斐を感じさせるのである。

K夫人の六畳の南向きの窓から明るい陽射しがいっぱいさしこんで、御主人の遺影がにこやかに私達を眺めて居られる。花好きの夫人は彩とりどりの沢山の花に囲まれて居られる。手をのばせば届く様に茶道具、文房具、本、紙、拡大鏡、クスリなどの必要品が身のまわりに所狭しと雑然と置かれて気持ちをほぐす様に気楽にさせる。日常ありのままのK夫人の部屋は自分の部屋のように安らいだ気分になる。

「喜びを見つける」

「絶えず祈る」

「感謝する」

「笑顔を忘れぬ」

と自筆で書かれたK夫人の標語が貼られて目にとまる。此の言葉通りに日常生活を実行なさって居られる。自作の色紙に描かれた花や果実の作品も並べられてある。銜いのない簡潔な作品は熊谷守一氏や武者小路氏の境地を思わせる様に清々しい。

若奥さんの東京からのお土産が並べられる。これらを特に私に味わせたいというのは二人共東京育ちの江戸っ子どうしだったからである。

ふじむらの羊羹、日本橋人形町の人形焼、浅草の雷おこし、金太郎飴、など郷愁をよぶものばかりで老人のささやかなたのしい宴である。

二人共重度の難聴者なので声を大きくしても時々会話がちぐはぐになるがそれでも通じ合い気持も共鳴する。おかしいけれどたのしいのである。昔育った町の思い出話から社会批評まで話はつづく。日頃家族の中に居ても耳が遠いのでなかなか話しかけてもらえず置き去りにされる孤独感をしみじみ味って居る身にとって自分の心を自由に開ける時である。はためには無邪気な老人がたのしんで居る姿であるがここまで辿り着くまでにはそれぞれの人生の旅路を経て来たのである。K夫人は将来ある立派な御長男を青年期に病で失われたり、戦争時代の苦労を胸の奥深くたたみこまれても現在は明るく無邪気に心豊かに親切に人に接し行動されて居られる。私も命にかかわる大病を二回してその手術の後遺症を今でもかかえて居る身である。苦しみの中に閉こめられても必ず救いの窓を用意しておいて下さるとの聖書の言葉に励まされてここまで来させていただいたのである。

「老いる事も御恵みですね、若い時に気がつかなかった事が判り、人への思いが寛容に謙虚になり、消えてゆく物質への欲望もなく淡々となれる様になりましたね。神の御はからいを信じてお任せする安定感をもって生きてゆかれるようになりたいと思ひますね。」と清貧の生活と信仰を同じくする二人の会話は穏やかな時もある。日常茶飯事の身近な話もあるし、時々この様に老いてたのしいひとときを持つ。

満ち足りた心で路傍の野草に優しい眼を注ぎながら又歩きにくい坂道を帰って来る。

・早春の光のごとく穏やかに

ほのあたたかき人と語らふ かず子

(中部日本歌人协会会员)

☆ 漱石の電話嫌いはよく知られている。作家鳥尾敏雄も、「ぼくは電話が嫌いだ。というよりも恐ろしいと言った方がよい。」(「電話恐怖症」)と言っている。少年の頃ぼくがはじめて受けた電話は、叔父戦死の訃報だった。この電話体験がいまだに尾を引いている。かと思えば團伊玖磨は随筆「怪電話」の中で「電話という物を僕は妙に好きである。…僕はダイヤルを廻すのが好きなのだ。誰かがダイヤルを廻わした結果として鳴ったこち

らの電話の受話器を取るのが好きなのである。好きなのはこの瞬間迄で、この瞬間以後に行われる所謂会話はそれほど好きでない…」彼はダイヤルを廻す快感を楽しんでいる。今日、電話が出てこないTVドラマや小説を探すのはひと苦労だ。水上勉の長編「波の暦」(新潮文庫)も全篇これ電話。最近赤川次郎の「幽霊屋敷の電話番」(新潮社)がでた。

☆ 幅広いファンをもつ松任谷由美の歌にもしばしば電話が登場する。「影になって」('79)には「指が痛いほど残らずダイヤルしたけれど 呼び出しの音だけが耳の底に繰り返えす…」とある。「誕生日おめでとう」('88)になると「あなたの部屋に電話するわ」となり'90の「Miss Broadcast」には「Sweetな夢見る夜明けをひき裂く国際電話」というぐあいである。今や電話はプッシュ式が普及し指など痛めることはなくなったし、電話依存の人は、リダイヤルで、次々とボタンをおしまくる。

☆ 多くの電話相談機関では若者からの電話が顕著に減少しているという。この背景には最近の若者の生活感情の変化がある。そこで若者向けの電話相談のPR用のコピーをとりあげる。ある電話相談は当初「あなたの悩みに愛のアドバイス 何でも気軽に相談してネ」からはじめた。それが

「どうしよう。友だちにも話せない。親にも相談できない。電話だから話しやすい。匿名だから何んでも相談できる。だからひとり悩まず、ピッポッパー」最後が新鮮にひびいた。やがてこれは「青春をふみはずすとあぶない。ちゃんと聞くからしっかり効く。そんな自分にいちばん迷惑するのは自分なんだ」にかわる。素人風からプロ風のコピーに変わってくる。若者はどのコピーに来るだろうか。

## 廻わすか押すか

長岡利貞



☆ 電話相談活動の最初の仕事は電話番号をいかに周知させるかだ。思いつくのはゴロ合せ。「味は一番 電話は二番 店は角から三軒め」といくと都合がよい。7867をナヤマナ、9671をクローナイ、4152をヨイコニと苦心の跡がうかがえる。だがこれらはいずれも受ける側の感覚や発想からでたものだ。このゴロ合せでダイヤルする子どもや若者はなにをイメージしているだろうか。かけ手と受け手の間にズレはないのだろうか近ごろの若者の「悩む能力」はたしかに失われつつあるかに見える。だが訴えることがなくなったわけではなかろう。

☆ 岩波書店の「広辞苑」第1版('55)の「相談」の項には短く「はなしあうこと。談合」とある。第2版('69)には「対策などを話しあう。談合。」とある。それが第3版('83)、第4版('91)には「互に意見を出して話しあうこと。談

合。また他人に意見を求めることという語録を示し、「対策を  する」「人生  」という用例をあげている。」学研国語大辞典('89)には「自分だけで解決できそうにない問題を解決するために、他の人の意見を聞いたり、自分の意見をのべて話し合ったりする」とていねいである。「電話」も「相談」もともに大きく揺れ動いている。

(栢山女学園大学人間関係学部助教授  
いのちの電話訓練委員)



# 窓



## ネットワークへ

### ●はじめの一歩

1990年10月名古屋で自殺予防シンポジウムが開かれ、大会テーマは「いのちをまもるネットワーク」でした。自殺予防シンポジウムの記録を読み返してみると、次のように書かれています。

「いのちをまもる」運動は一握りの専門家に任せておくだけでは充分ではないことは周知のとおりです。従来から関連する行政機関・関係団体はじめ各種の市民団体がそれぞれ取り組んできましたが、いまひとつ迫力が欠けていました。これらの関係者は等しく「連携」を口にしますが、必ずしも実効が上がっていないように思われます。事実、この運動に参加している人たちは、日々の業務や実践の中で、無力感や孤独感に悩んでいるのが実情ではないでしょうか。(中略)私たちはここに新しいコンセプトとして、「ネットワーク」という言葉を提案したいと思います。私たちが願っているのは、従来からいわれているような、情報交換とか連絡組織網をつくるという考えをのり越えようとするものであり、いのちをまもるという共通の主題に心を寄せる人達の「呼吸」ともいってよいと思います。

### ●電話相談のネットワーク

自殺予防シンポジウムの中で、援助活動の発展と質の向上を目指すには地域でのネットワークづくりが必要だということが明らかになってきました。そして、ネットワークをつくるには自由で役割にとらわれないボランティアシップの人々が運営しているいのちの電話が最も適役であろうとい

うことになったのです。

名古屋いのちの電話にできるネットワークづくりを考えてみると、この地域での電話相談のネットワークです。さっそく準備会を開き、おもだった電話相談機関に研究会のおさそいを送りました。

第1回の(仮称)電話相談研究会は91年6月に開くことができました。こころの電話をはじめとして8機関が参加していただきました。その後、月1回のペースで研究会を開きました。まず最初にわかってきたのは各々の電話相談機関の内容でした。相談のシステムや受信件数など、意外とお互いを知りませんでした。また、それぞれの電話の特徴によって、利用者の傾向や問題点の違いもはっきりしてきました。これまでも利用者の求めに応じて互いに紹介しあってきましたが、お互いの機関の特徴をよく知るることによって、さらに上手な紹介ができるはずでした。

### ●全国大会とその後

91年9月、全国電話相談研究会から92年の全国集会を名古屋で開くよう要請されました。さっそく準備にかかり、何度も話し合った結果、大会のテーマを「電話相談への期待と社会的責任」としました。

名古屋大会は準備の甲斐あって参加者が400名にもほり盛会となり、翌日のワークショップも満員となりました。

愛知電話相談研究会は「愛知電話相談ネットワーク」と改め、隔月で研究会を開いていくことになりました。今後も地域での電話相談のネットワークづくりの中心になっていきたいと考えています。みなさまのご参加を期待しています。

(電話担当のある日)

夕方からの担当の日でした。その日の電話は一つ一つ、心の痛むものばかりでした。その上、担当終了直前に取った電話が長引いてしまいました。夫も子供も、今日は食事はいらないと行って出掛けてはいたのですが、かなり遅くなりそうなので、留守番電話を入れておこうとダイヤルを回しました。

すると、低い声で「もしもし」と、言うではありませんか。一瞬、泥棒! と思いましたが、それは夫の声でした。

「どうしたの?」と私。

「調子が悪くて早く帰ってきたよ。」

「えっ? ご飯は?」

「まだだよ。」

「熱があるの?」

「心配なくていいよ。」

疲れ切った夫の声に、後片付けもそこそこに、車のアクセルを踏みました。耳の奥で先程の利用者の声と、夫の声が渦巻いていました。通り慣れた道です。大きな交差点を曲がると、また信号です。前の大きなトラックがすーと前に進みました。私も…

突然、キーと、いう鋭い音が響きました。あわててブレーキを踏みました。私の目の前に大きなバンが横向きに止まり、けたたましくクラクションを鳴らし、「どこ見てんだ。赤が見えんのか!」と、怒鳴り声が飛んできました。「気をつけろ!」という怒鳴り声を残して、その車は走り去ってしまいました。周りの車のヘッドライトが私を照らしたし、その窓から鋭い目がこちらを睨んでいました。見上げると、真っ赤な信号が雨で濡れていました。

(A・H)

ロトくん & オルくん



女そめぞす道はキビーい...



## ご援助ありがとうございます

1992年10月1日より12月末日までに下記の方々から暖かいご支援をいただきました。一同深く感謝いたしますと共に  
ご報告申し上げます。(順不同・敬称略)

社会福祉法人愛知「いのちの電話」協会  
理事長 相馬 信夫  
財務委員 会

- |   |   |  |  |                                      |                            |  |                                   |  |  |  |  |   |  |   |  |   |  |   |  |   |  |  |   |  |  |  |  |  |  |   |   |  |  |  |  |
|---|---|--|--|--------------------------------------|----------------------------|--|-----------------------------------|--|--|--|--|---|--|---|--|---|--|---|--|---|--|--|---|--|--|--|--|--|--|---|---|--|--|--|--|
| 賛助会員 (A)<br>吉田加高 藤島田次 松田<br>名山 藤島田次 松田<br>加高 藤島田次 松田<br>傍吉 芝植 柴 | 明院春和 夫枝り 爾子<br>弘修 迪弘 茂好 ゆ徒 純<br>道 弘 茂 好 ゆ 徒 純 | 川中山岩 服石前大早<br>村野口田部 黒田橋川<br>川中山岩 服石前大早 | 夫美人子 六敬子 子男<br>敏悦 真圭み 友豊 恒重<br>や 友 豊 恒 重 | 近尾宮島山 岩北佐片<br>藤崎邦田 田 木山<br>藤崎邦田 田 木山 | 昭幸・正 正亮都 武主<br>昭幸・正 正亮都 武主 | 二夫子 實義 二子 昭水<br>藤會 榎秋 塩立 恒高<br>藤會 榎秋 塩立 恒高 | 吉澤本重 野松川本<br>康俊久 高 新紀<br>康俊久 高 新紀 | 司三 江殉子 元市子<br>橋須 森上 雪興 木伊<br>橋須 森上 雪興 木伊 | 本藤 田聖 佐久 孝<br>順よ 茂裕 幼間 昭一<br>順よ 茂裕 幼間 昭一 | 子子也之 園止 二子<br>松菅白 櫻柳 文内 前<br>松菅白 櫻柳 文内 前 | 岡原石本 原藤 藤田<br>松菅白 櫻柳 文内 前<br>松菅白 櫻柳 文内 前 | 進子 喜幸 枝野 子子<br>美智 俣佳 紀文 正<br>美智 俣佳 紀文 正 | 江子 子敏 一子 義樹 尚郎<br>浪博 明 舜美 正 正篤 剛三<br>浪博 明 舜美 正 正篤 剛三 | 川塚村木 山井 松森 玉嶋<br>長下 佐杉 新村 大児 高<br>長下 佐杉 新村 大児 高 | 藤津原 隈谷 田部 倉藤 藤<br>遠河 菅松 柏成 服朝 齊安<br>遠河 菅松 柏成 服朝 齊安 | 朗子 充子 を 男 夫 子 子 子<br>義絹 俊三 三 芳 久 康 睦 万<br>義絹 俊三 三 芳 久 康 睦 万 | 川村 村塚 森 田 田村 来<br>恒竹 津飯 金原 岩 森 大 松 菜<br>恒竹 津飯 金原 岩 森 大 松 菜 | 次子 惠勝 ら 嘉 衛 子 子 倫 幸<br>健み 美 小 忠 育 夏 正<br>健み 美 小 忠 育 夏 正 | 田藤 川 田 井 田 洞 藤 見 谷<br>本伊 石 大 松 黒 養 工 宇 岸 森<br>本伊 石 大 松 黒 養 工 宇 岸 森 | 彦子 雄子 之 惠 郎 子 栄 翠 子<br>雅郁 幸 倫 寛 わ 喜 和 幸 郎 英<br>雅郁 幸 倫 寛 わ 喜 和 幸 郎 英 | 尾橋 藤 藤 谷 崎 瀬 田 野 一 久<br>小高 加 加 森 川 間 柴 森 岩 和<br>小高 加 加 森 川 間 柴 森 岩 和 | 治一 子 茂 子 乃 惠 子 子 子 康<br>貞敬 泰 蓉 茂 章 澤 邦 洋 弘<br>貞敬 泰 蓉 茂 章 澤 邦 洋 弘 | 賛助会員 (B)<br>田手内 上 田 本 田 保 田 井 良<br>武 鎌 竹 三 鎌 橋 山 折 岩 永 多<br>武 鎌 竹 三 鎌 橋 山 折 岩 永 多 | 昌一 子 樹 美 哉 道 里 子 枝<br>武 敏 和 登 多 隆 美 あ 伸<br>武 敏 和 登 多 隆 美 あ 伸 | 田橋 崎 垣 藤 田 部 幡 木 部<br>山 丹 岡 石 近 町 春 小 佐 服<br>山 丹 岡 石 近 町 春 小 佐 服 | 美郎 子 子 子 倫 樹 司 子 子<br>磨一 好 か 鈴 芳 健 い と<br>磨一 好 か 鈴 芳 健 い と | 全内 敷 山 谷 田 原 水 田 條<br>木 山 矢 深 洞 堀 菅 滑 河 北<br>木 山 矢 深 洞 堀 菅 滑 河 北 | 子子子 一 男子 和 子 典 丸<br>博美 壽 辰 和 美 平 靖 芳 秀<br>博美 壽 辰 和 美 平 靖 芳 秀 | 野田 野 藤 田 瀬 居 永 出 田<br>矢 栗 水 佐 藤 湯 鳥 松 小 永<br>矢 栗 水 佐 藤 湯 鳥 松 小 永 | み 弓 陽 子 一 子 江 昭 恵 子<br>ひ 真 美 三 栄 妙 初 よ 暁<br>ひ 真 美 三 栄 妙 初 よ 暁 | 木原 塩 友 橋 本 島 谷 藤 原<br>鈴 菅 小 西 高 山 小 古 近 松<br>木原 塩 友 橋 本 島 谷 藤 原 | 枝り 緑 子 一 子 郎 眸 江 丞 郎<br>智 多 千 敏 恵 善 美 丸 猛<br>智 多 千 敏 恵 善 美 丸 猛 | 村川 島 橋 田 嶋 本 下 田 田 川<br>花 早 中 棚 岩 武 山 森 岡 山 小<br>花 早 中 棚 岩 武 山 森 岡 山 小 | 恵昇 一 子 美 子 子 男 勇 子 子<br>亮 充 暗 公 佳 良 美 津 津<br>亮 充 暗 公 佳 良 美 津 津 | 賛助会員 (C)<br>原原 内 谷 沢 村 宮 本 口 田<br>藤山 小 梅 河 常 橋 江 出 細<br>藤山 小 梅 河 常 橋 江 出 細 |
|---|---|--|--|--------------------------------------|----------------------------|--|-----------------------------------|--|--|--|--|---|--|---|--|---|--|---|--|---|--|--|---|--|--|--|--|--|--|---|---|--|--|--|--|

上記期間内に何度もご寄付くださった方もお名前は1回にさせていただきます。

○印の方は1992年度賛助会員募集運動に協力し入会下さった方々です。

感謝をもってご報告いたします。

### 点滴

『花は皆、破壊者に会ってはすることもできない。彼らが断末魔の苦しみに叫んだとて  
も、その声はわれらの無情の耳へは決して達しない』 岡倉 覚 三

天心岡倉覚三 (1862-1913) が英文で書いた「茶の本」(1906) の第6章「花」のなかの言葉。  
西洋社会で花が浪費されがちなのに比べて、東洋の茶の世界では花をいわば花の心で生かす。  
地球上の生命の仲間として、小さな野の花をもいつくしむのである。天心には「花の叫び」が  
きこえたのであろう。原文は英語。邦訳は村岡博さん (1929) による。

これは中日新聞の「今週のことば」に飯島宗一さんが書いておられたものです。目まぐるしい社会の中で、  
走るようにあわただしい毎日を送っているのは花の叫びどころか、道ばたの草さえも見えていないのではない  
だろうか。先ごろ私は、大切な方との約束を守れなくてその上預けた物を受取りに行くことさえ忘れてしまっ  
た。その方から、人は忙しいと心を亡す。大切なことも忙しいと忘れてしまう。忘れるとは「心を亡くす」  
と書く。また忙しくない時にとメモを託された。気にかかりながら自分の責任の方を選んでしまったのだが、  
事が多く忙しくしているということはそういうことなのだろう。いつも走っているのはまわりが見えない。時  
にはゆっくり歩いてまわりをじっくり眺める心の余裕と豊かさが大切なのだとつくづく思い知らされた。ど  
んなに小さなことも見逃さないで心にとめられるゆとりが欲しい。電話のむこうのどんなに小さな叫びも聞  
える心のゆとりを持ちたい。岡倉覚三のことばが痛く心を突く。 (S. S)



## 第9回 チャリティー

### クリスマス・オルガン・コンサート

名古屋いのちの電話主催、酒井多賀志先生のオルガンと、コール・コラーレのクリスマスキャロル合唱によるコンサートは、中日新聞、中日新聞社会事業団、東海テレビ放送、東海テレビ福祉文化事業団の後援、そしてカトリック南山教会の全面的支援によって、同教会大聖堂において、昨年暮の12月20日（日）午後2時半から約2時間開催された。

12月20日は各教会でクリスマス行事が行われているところが多く、参加聴衆の心配をしていたが、前年を上廻る350名が集いクリスマス音楽を満喫し盛会裏に終了した。

近年オルガブームと云われているが、酒井多賀志先生の活躍はNHKの放送でも、又、先生の作曲による琴や尺八とパイプオルガンとの協奏曲に見られる新しい分野への活躍がブームを促進しているものと思われる。しかし、今回はクリスマスにふさわしい宗教曲が主流で聴衆を魅了せずにはおかなかった。又、コール・コラーレによるクリスマス・キャロル集の合唱は調和のとれた涼やかな歌声を聞かせクリスマス喜びをひとしを加えるものであった。



#### 名古屋いのちの電話日誌

- 11月12日 財務委員会
- 14日 講演会
- 16日 訓練委員会・運営委員会
- 27日 愛知電話相談ネットワーク
- 12月14日 訓練委員会
- 20日 第9回チャリティーコンサート
- 1993年
- 1月18日 運営委員会、訓練委員会
- 22日 財務委員会
- 29日 愛知電話相談ネットワーク
- 2月15日 運営委員会・訓練委員会
- 22日 理事会・評議員会

#### ご寄付下さる皆様へ

当協会への寄付金については所得税や法人税の優遇措置が受けられます。

★ 個人の場合

確定申告によって、所得税法、(第78条1項・2項3号)の規定により寄付金控除が受けられます。

- ・寄付金額又は
- ・所得額×0.25

のいずれか低い金額

－(1万円)＝寄付金控除額

★ 法人の場合

確定申告によって寄付された金額を法人税法(第37条2項・3項3号)の規定により、一般損金算入の枠の他にこれと同額枠の損金算入枠が認められます。

★ 本協会の発行する領収書は上記の措置を受ける確定申告のため大切に保管して下さい。

お問い合わせは…

社会福祉法人愛知いのちの電話協会  
事務局 ☎ 971-5181

社会福祉法人愛知いのちの電話協会

名古屋いのちの電話

〒461-91 名古屋東郵便局 私書箱第257号

事務局 ☎ 052-971-5181

相談電話 ☎ 052-971-4343

郵便振替口座 名古屋 1-53758

東海銀行大津町支店(普)預金口座 477029

1993. 早春

1993年2月1日発行

発行人 相馬 信夫

編集人 広報委員会